



第40号

さらしなの里

友の会だより



2019・春

土器作り 想像することの楽しさ

さらしなの里の縄文祭りは二度ほど見させていだいていました。土器作りができるというので妻を誘って参加させていただきました。

館内に入るとアボリジニの作品が飾ってありました。学芸員の翠川泰弘先生が講師を招いてアボリジニについての講演会を開催したとか。私は以前NHKの新日曜美術館で紹介されたアボリジニのエミリー・ウングワレーの展覧会を観たり、国立民族博物館のアボ

リジニの絵画や道具類を観たりしていたので、こんな身近に作品があることに大変驚きました。翠川先生のお話では、アボリジニは昔から伝わる神話を線や点を使って表すそう、縄文土器の模様の意味とも通じるところがあるかもしれないというお話でした。自然の中で大地とともに生きるという意味では、この縄文の里にアボリジニの作品を持つてくるというのはとても興味深く、おもしろい試みだと感じました。



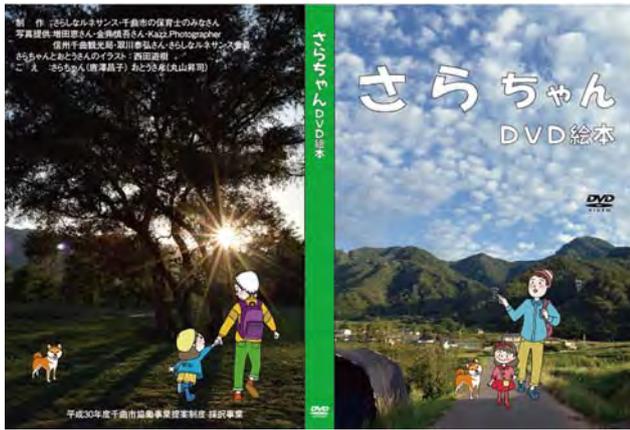
土器作りの前に、実際の縄文土器を見せていただきました。翠川先生が二つの土器を示され「何か気がつきませんか」と質問されました。なんだらうと思ってお話を聞くと、男性が作った土器と女性が作った土器がある

のではないかと意識しました。細部までこだわって作るのは男性の方だということでした。制作が終わって家に帰ってから妻が私に「お父さんの土器と私の土器を比べると、私の土器の方が大ざっぱだよねえ。先生の言ったとおりだねえ」と言うのです。なるほど、先生の話はこういうことかと実感したものです。

また、私たちが使わせてもらった粘土には黒曜石のかけらが混ぜられていました。これは翠川先生の独自の土作りで、土器の焼成の際に割れにくくなったり、黒曜石が熱で溶けて土器が強くなったりとすることでした。私たちの制作の最中も、ずっと、この土作りをしていらっしやいました。

先生は時折、私たちの制作の様子を見て、それぞれの制作意図に合うような土器や、模様のコピーを持ってきてくださり大変参考になりました。また、土器の種類やどこで出土しているかなど、その都度話をされ、縄文の時代に思いを馳せながら楽しい時間を過ごさせていただきました。そのせいもあり、先日、新潟県十日町博物館に国宝の火炎土器を観にいってきました。縄文人の想像力や技術のすごさをまた改めて感じた次第です。縄文時代への興味はつきません。ありがとうございました。

(榎山・小林雅俊)



本誌38号でお知らせしたさらしなの里の絵本「さらちゃん」の動画版ができあがりしました。絵本は販売しないことから手に取れる人が限られていたため、制作したさらしなルネサンスでは、音楽やナレーションを入れた動画（DVD、約8分）を作りました。ホームページをはじめ、ユーチューブなどにも6月までにアップ。地球上のだけれどもどこからでも絵本に世界に触れてもらうことができます。

さらしなの里は古くから「月



「さらちゃん」“動く絵本”に

の都」として全国に知られていました。月を美しく見せる景観や自然、文化があったからです。それは今も残っており、そのことを子どもときから感じてもらうとうと作られたのが「さらちゃん」でした。おとうさんと一緒に、あんずの花が咲く畑や水を張った「姨捨の棚田」、都人が越えた古峠、鏡台山から上る名月などさらしなの里の代表的な風景を訪ね、成長していく物語です。

動画版はそれぞれの風景で交わされる2人の会話を、ナレーションにしています。2人のイラストも風景を実際に訪ねているように登場、臨場感たっぷりです。古峠から眺めるさらしなの里の夜景は光がほんとはキラキラ輝いています。音楽、効果音、肉声も盛りこめる動画ならではの物語のおもしろさ、里の美しさが楽しめます。

動画版は映画のDVDのようにケース入りにしたものを300枚制作しました。千曲市内の全保育園、教育関係の施設などに贈呈しました。

リレイ
里麗エッセイ

大岡芦ノ尻の道祖神様

八幡 源関博美



仕事を退職してから家に居る時間が増えました。時間があると、どこかに出掛けたくなりまます。かといって遠くのことばかり知らないで、近くのことを書いてある本を買ってききました。その中に芦ノ尻の道祖神様が書いてありました。

大岡の道祖神様のことは、ずっと前に一緒に働いた元長野県考古学会長の森嶋稔先生が世の中に紹介したので、話を聞いていました。

お正月に使ったしめ飾りを材料として、毎年新しく一月に作られます。

作られたばかりはまだ目の上のまゆや、ひげがピンと上を向いています。一年経つと色も黒っぽくなり垂れ下がってきます。でも芦ノ尻の地区の方々がしっかりと守ってくださいるので、道祖神様も綺麗に最後まで残っています。

道祖神様の所で写真など撮っていると、同じように道祖神様を見に来ている調べている人とも行き会いました。いろいろな所で本などにも書かれて有名になってきていることを感じます。

山間の部落は、だんだんと人数が減ってきていると聞きます。これからもずっとこの道祖神様を守ってほしいと思います。そして、いろいろな方々に紹介してほしいです。

ぜひ一度見に行ってください。

縄文研究の第一人者、小林達雄さん（国学院大学名誉教授）の講演会が3月17日、さらけの里歴史資料館で行われました。演題は「縄文人の心と文化力」。考古学の成果をふまえ、縄文人の心や精神世界を解き明かすお話で、ここでは二



縄文が発見した「老いの価値」

自然との共感でオノマトペ豊かに

ちんちん ギョウヤワ

つ、年を重ねる価値が縄文時代に初めて発見されたことと、縄文人が話していた言葉に関することを紹介します。

縄文時代は狩猟しながら移動していた遊動生活から、住む所を定めた定住生活に変わったことが大きな特徴です。それが可能になったのは、日本列島が温暖化でクリのような木の実などが取れて食料が豊かになったためです。

小林さんは、遊動生活のときには足腰が弱くなった老人は置いてけぼりにならざるをえなかったといまます。若い夫婦は自分の子どもを面倒をみるのが精一杯だったからです。しかし、定住生活によって足腰が弱くなっても老人は天寿を全うできるようになったといまます。

それによって老人の持っている情報や豊かな知恵が孫にも伝えることができようになりました。これが村のはじまりで、そこには現代の図書館や文化センターにつながる機能も生まれ、社会生活が営まれる空間ができました。豊かな造形の土器や土偶もその反映だそうですね。つまり「老いの価値」が縄文時代に初めて発見されたのです。

次は縄文人が話していた言葉についてです。文字がない時代なので、はっきり知ることはできませんが、現代のわれわれが使っている言葉につながっているのは間違いありません。

そのつながりの一つの例として小林さんが取り上げたのが、春の小川の流れをいう「さらさら」や、風に揺らぐ森の「ざわざわ」

など自然の姿を音で表現するオノマトペ（擬態語、擬声語）です。1万年にわたって自然と共存共生してきた縄文人の心が作りだしたと小林さんは言います。

オノマトペの多さは日本語の特徴ですが、それは自然との境界をもうけず、自然と同じ目線だった縄文人のものの見方がおおもとにあるということ。縄文人の自然との関係について「共生共存」と言われますが、「共感共鳴」とも言えるそうです。

このお話の中で面白い指摘だったのは「今日は何を食べたい」と聞かれたときに「私はうなぎ」と言う日本語の構造です。英語に直訳すると I am unagi となり、これはおかしいとよく指摘されますが、うなぎとの境界をつくらない縄文人のものの考え方の名残りかもしれないということ。です。

講演の内容は、小林さんの近著「縄文文化が日本人の未来を拓く」（徳間書店）でも詳しく展開されています。（芝原区・大谷善邦）

国学院大名誉教授の小林達雄さん講演会

学芸員の翠川泰弘さん逝去



さらしなの里歴史資料館学芸員の翠川泰弘さんが2月25日、お亡くなりになりました。同資料館は羽尾区の圃場整備に伴う発掘調査で明らかになった、当地の縄文時代の姿を発信するため1992年に建設され、国学院大学で縄文を専攻した翠川さんが初代学芸員となりました。

自然と共生共存した縄文人の暮らしを紹介することに翠川さんは情熱を傾け、石器・土器づくりや火起こしなど縄文人の暮らしぶりを体験するプログラムをいくつも考案しました。今でこそ世界文化遺産になろうとしている縄文文化ですが、当時はまだ体験を提供する施設は少なく、先駆けでした。

開館に合わせて発足した「さらしなの里友の会」から祭りをやるうという提案を受け、毎年秋に行われる縄文まつりの企画を練りました。地元の人々の力を結集させ、縄文時代の人々の暮らしの精神が当地に今も息づいていることを証明するまつりに育て、地域内外から高い評価を得ました。

千曲市稲荷山の蔵の街並



みを国の重要伝統的建造物群保存地区に指定する仕事をするため一時期、資料館を離れましたが、再び着任。近年は芸術の意味を縄文時代の暮らしにまでさかのぼる講演会を開くなど、縄文を新たな角度で紹介する取り組みを始めたところでした。

翠川さんは旧長門町（現長和町）の生まれ育ちでした。そうした外の目をもっていたからこそ冠着山の麓という特長に注目し、そこに暮らす人たちの精神性に注目できたのだと思います。ご冥福をお祈りします。翠川さんが2001年にお書きになったエッセイがインターネット上で読むことができます。翠川さんの名前前で検索してみてください。



新スタッフの方々

本年4月から、さらしなの里歴史資料館の館長を務める北島利幸です（写真中央）。3年前に千曲市役所を定年退職し、社会福祉協議会に再就職しておりましたが、再々度、市の施設に勤務させていただくこととなりました。今までと一味違った、縄文文化の薫り高い地の博物館施設であり、若干の戸惑いもあることも事実です。

さて先般、長年にわたり本館の中心的な役割を果たされてきた翠川泰弘学芸員が、思わぬ事故で帰

らぬ人となってしまいました。私も旧戸倉町に在籍しており、翠川君が入庁した頃からのお付き合いですので非常に衝撃を受けております。彼の残した多くの功績を称えるところに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

さらに本年度、諸事情からベテランぞろいだった職員が総入れ替えという事態になりまして、右も左もわからなぞい新人ばかりで日々奮闘しております。新米館長のほか、金井幸一（写真左）、塚田あけみのフレッシュな3人態勢で本館の運営を担当してまいります。さらしなの里友の会や地元の皆様さま、また多くの関係者の皆様さまのご理解、ご支援をいただいて頑張つてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

編集後記 翠川泰弘さんの早逝は残念です。トップページの写真は昨年の冬、資料館の広場で翠川さんが行っていた土器の野焼き。最上部が小林雅俊さん制作の土器です。資料館前スタッフの大谷千尋さんが撮影していました。講演にきていただいた小林達雄さんは翠川さんの恩師。翠川さんは開館に向け張り切っていたそうです。